

Fukushima Hamadori Cinema project 2025



福島浜通り シネマプロジェクト



表紙イラスト：向田優

2022年夏、2023年冬、2024年秋に続き、2025年度も福島浜通り地域・双葉町にて、今回で4回目となる「福島浜通りシネマプロジェクト2025」が12月16〜20日に開催された。

「ぼくらのレシビ図鑑シリーズ」など映画を活用した地域プロデュースを行うキネマ旬報企画・映画24区が、経済産業省と共に立ち上げた本プロジェクトは芸術・文化を通じた街づくりを行うべく、映画づくりに着目。福島県内の地元市民および日本全国から集まった学生・若者たちがプロのスタッフと共に双葉町で映画づくりに挑戦する。

具体的にはロケハン、脚本づくり、撮影、編集、上映会と、映画づくりの全工程を同世代の仲間と協力して、5日間で映画を完成させる。初めて出会う仲間と過ごす濃厚な時間は刺激的な体験になることだろう。

当日は、冬の寒さを感じながらも、天候に恵まれた5日間となった。映画

復興・再建が進む 福島浜通り・双葉町にて 5日間にわたる 映画づくりに挑む

画づくり体験は2班に分かれ、チームリーダーの若手監督4名をはじめ、制作をサポートするスタッフを配置。さらに、映画づくり経験のある学生リーダーがチームを引っ張っていく。2班をサポートする本部スタッフにはプロの制作陣を揃え、こちらにも本プロジェクトに連続参加する学生リーダーを招いた。

これから大きく変わっていくであろう「福島県浜通り地域」。2025年現在の双葉町は参加者の目に、どのように映るのだろうか。

概要

Fukushima Hamadori Cinema Project 2025

2011年3月11日に発生した東日本大震災で甚大な被害を受けた福島県浜通り地区。その中の双葉町は、10年以上0人だった居住者が徐々に増え続け、2025年4月現在、190人ほどに。政府は地域住民の生業の再建や企業誘致に着手し、復興・再生に向けてさまざまな事業を推進している。

そんな中、映画24区は芸術や演劇で新たな彩りを地域にもたらし、その魅力に惹かれる若者たちが集う流れを作っていきたいと、芸術・文化を通じた地域活性化イベント「福島浜通りシネマプロジェクト」を企画。第一線で活躍する映画監督やプロのスタッフたちを福島浜通り地域に招聘し、日本全国から集まった学生・若者たちと共に、映画づくり体験から将来のまちづくりを考えていく。



ごあいさつ

双葉町での映画づくりで
生かされる
人づくり、まちづくり――

2022年度の夏に経産省からの委託事業として始まった「福島浜通りシネマプロジェクト」は、一過性で終わることなく、10年間続けることを一区切りの目標として立ち上がりました。

復興の最中、年々移り変わる双葉町の姿を、プロの映画人と全国から集まった学生たちが共にカメラを通じて、「映画」という形で記録し続けるプロジェクトです。と同時に、震災前から双葉町に伝承されてきた歴史や文化、そして震災以降、遠く離れた場所から双葉町に思いを馳せる人々の心の中にある「変わらない双葉町」の姿も改めて見つめ直す機会になれば幸いです。

4年目を迎える今回は、双葉町駅西エリア管理組合の皆様にご協力いただき、双葉町民の子どもたちが撮影にキャストして参加してくださいました。町民が0人の状態から始まった本プロジェクトゆえ、念願の町民参加は大変喜ばしいことでした。また、制作拠点を提供してくださった浅野燃糸様、ロケの撮影にご尽力いただきましたふたばプロジェクトの皆様にも心より御礼申し上げます。そしてこのプロジェクトに参加してくれた学生やスタッフたちが今後も双葉町の変化に関心を持ち続け、ひいては近い将来、直接的・間接的な形で双葉の発展に貢献してくれることを節に願っています。

三谷一夫

(株)キネマ旬報企画 映画24区事業部プロデューサー。映画スクールを運営する傍ら、映画・ドラマ・CMなどの企画・制作および配給を手掛ける。近年は全国の自治体や地場企業と組んだ映画プロデュース企画や作品に数多く携わる。



Crew

水野彩美
(学生リーダー)
一宮レイゼル
伊藤脩平
小熊美由紀
鈴木智恵
中蘭葉々子



プリンセス・アンポール

フィリピン出身。高麗大学メディアスクール卒。2024年に短編「バサルボン」を脚本・監督・プロデュース、現在SNSショートドラマ「ハロハロ・ハウス」の脚本・監督を務める。初の長編映画監督作を準備中。



四宮義斗

1990年生まれ、徳島県出身。俳優として映画やドラマなどの制作に携わる。2025年には制作スタッフとして参加した「すとなん」、俳優として出演した「道草キッチン」が公開。



迫あすみ

神奈川県出身。大学卒業後カナダで映像を学ぶ。卒業後帰国、撮影助手として主にドラマの撮影に携わる。2014年から2年間はオーストラリアを拠点に活動。2021年撮影監督として独立。

Leader



林真子

1996年生まれ、兵庫県出身。大学卒業後は主に美術部として作品に参加。大学時代の仲間と映像制作集団「世田谷センスマンズ」を結成。初長編監督作「これらが全てFantasyだったあの頃。」がびあフィルムフェスティバル2024で審査員特別賞受賞。

Leader



宮瀬佐知子

神奈川県出身。助監督、AP、キャストイングなどを経験した後、プロデューサーとして独立。短編監督作「ミルクレディ」が第21回大阪アジア映画祭スペシャル・メンション受賞。プロデューサー作品は「君が世界のはじまり」「宝島」など。

スタッフ紹介

2チーム体制で制作。若手映画監督ほか、撮影・録音・編集を指導する制作スタッフや車両担当をそれぞれ配置、本部スタッフも手厚くフォローする。

Crew

中澤莉胡
(学生リーダー)
中亮介
佳香
九條えり花
白川紗江
村川晴南



松本佳樹

1995年生まれ。神戸芸術工科大学卒業後、世田谷センスマンズに所属し編集などに携わる。「地球星人(エイリアン)は空想する」がSKIPシティ映画祭2023にて優秀作品賞&SKIPシティアワード受賞。



條々淳

電機メーカー勤務。エンタテインメントの新規事業開発に携わり、4D、ドローンなどを活用した体験型コンテンツの企画・推進に従事。現在は「映画館」を起点に、新たな体験価値の創出に取り組む。



二宮絵梨香

1998年生まれ、福岡県出身。主に俳優として活動し、2025年には主演作「はなびのひ」、ほか「早乙女カナコの場合は」「悪い夏」が公開。現在、初の長編映画監督作を準備中。

Leader



北林佑基

1996年生まれ。神戸芸術工科大学に進学し、石井岳龍監督に師事。映像制作集団「世田谷センスマンズ」を結成し映画制作に携わる。経済産業省の次世代クリエイター支援事業「創風」に採択され短編「バッキン太郎」を制作中。

Leader



渡邊りか子

1994年生まれ、福岡県出身。日本大学芸術学部映画学科卒業後、主に俳優として活動。2024年、初監督作「すとなん」が第19回大阪アジア映画祭インディ・フォーラム部門で入選し、翌年に2作目「心玉」との2本立てで劇場公開を果たした。

5日間のスケジュール



	12.16 四	12.17 金	12.18 土	12.19 日	12.20 月
7:00		朝食	朝食	朝食	朝食
8:00					
9:00	各自、現地へ移動 13:15 集合	伝承館見学 双葉を知る町ガイド	撮影準備	撮影 & 編集	発表準備
10:00					
11:00		昼食	昼食	昼食	上映発表会
12:00					
13:00		脚本づくり			昼食 & 地域交流会
14:00	オリエンテーション		撮影	撮影 & 編集	
15:00		双葉町の子どもたち 撮影に参加			
16:00	企画会議・シナハン等 オリエンテーション				
17:00					
18:00	夕食	夕食	夕食	夕食	各自、帰宅
19:00	企画会議・シナハン等 オリエンテーション	自由時間 (各チーム毎)	自由時間 (各チーム毎)	自由時間 (各チーム毎)	
20:00					



伊丹そら

2002年生まれ。沖縄県出身。京都芸術大学15期生。いまおかしんじ監督が立ち上げた国映映画研究部では短編「LOST」(23)、第21回大阪アジア映画祭では出演作「PEAK END」(25)が上映。



常本亜実

北海道出身。照明助手として「左様なら」(19)、制作進行として「メンドウな人々」(23)「闇島行」(25)が劇場公開されたほか、札幌座が手掛ける舞台の制作に携わる。



大宮実

数多くの作品に携わり、2025年には制作を担当した「道草キッチン」(白羽弥仁監督)が公開。その他参加作品に「ハローマイフレンド」(市井昌秀監督)、「神社悪魔のささやき」(熊切和嘉監督)など。



向田優

1987年生まれ。「Sin Clock」「メンドウな人々」(23)「ハローマイフレンド」(25)助監督や「ソレダケ that's it」(23)劇中コミック・アニメ作画などを務める。また放送芸術学院専門学校の講師も務める。

Staff

全体統括
三谷一夫
事務サポート
曹明実
我妻詩穂子
山下みお
星野晃志
バンフレット制作
稲越一之
岡崎優子
葛西佳子



村山暁

2002年生まれ。京都芸術大学卒業制作「お笑えない芸人」(25)では出演・助監督を務めSKIPシティ国際Dシネマ映画祭スペシャル・メンション受賞。出演作「ハローマイフレンド」が公開待機中。



日高真優

本プロジェクトには3年連続で参加。前回は参加者側の学生リーダーを務め、今回は本部制作スタッフの学生リーダーを務める。現在、大学3年生で映画制作を勉強中。俳優としても活動する。

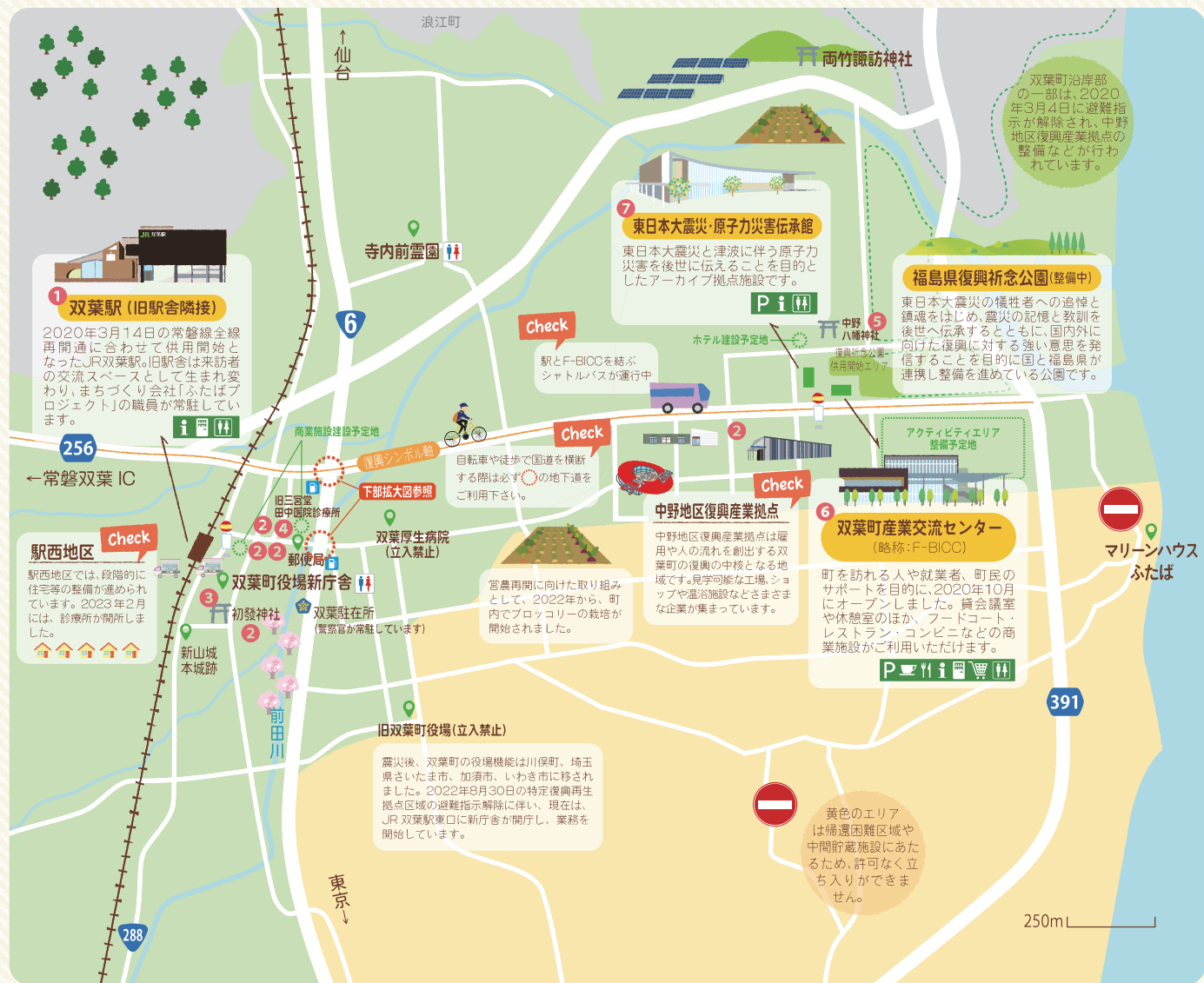


柳明日葉

熊本県出身。2023年、長編映画『テクノブラザーズ』で主演デビュー。初監督・脚本・主演作「レイニーブルー」が25年に公開。ゆうばり国際ファンタスティック映画祭ニューウェーブアワード賞を受賞。

双葉町の復興が見える地図

ver.4
2024年12月



旧駅舎憩いのスペース

双葉駅旧駅舎は来訪者の憩いと交流の場として活用。双葉町を紹介するパネルなども展示する。



旧三宮堂田中医院診療所

大正時代位に建造された木造洋館風医院建築。2022年に国登録有形文化財に登録された。



壁画アート

各地で壁画アート制作事業を実施するOVER ALLSが駅周辺の空き店舗などに壁画を描き話題に。



双葉町産業交流センター

復興の中枢を担う交流センター内には土産物店やフードコート、コンビニが入っている。



相馬妙見宮初發神社

大震災の影響で傾いた神殿などが修復された。由緒ある神社は今も昔も町民の心の拠り所。



東日本大震災・原子力災害伝承館

東日本大震災と原子力災害の貴重な資料が展示。災害を経験した語り部による講和も実施される。

Day1

オリエンテーション

12月16日、午後1時過ぎ。JR双葉駅に集合した参加者一行は、ひと足先に現地入りした本部スタッフに出迎えられ、オリエンテーションの会場となる浅野燃系の施設「双葉スーパーゼロミル」へ。糸やタオル製品を双葉町から国内外に発信していくと2023年にオープンした同施設は、復興産業拠点として雇用や人の流れを創出、新たな観光スポットとしても注目される。

浅野燃系のご厚意により広めの会議室が用意され、スタッフと参加者が初顔合わせ。北は北海道から南は九州と、日本全国から集まったメンバーはほぼ初対面、しかも初めて双葉を訪れる人がほとんどだった。

そこで、三谷一夫統括が本プロジェクトの趣旨を説明すると同時に、2011年に起きた東日本大震災・原子力災害の影響で当時7000人だった住民が全員退避、人口ゼロだったプロジェクト立ち上げ当初の双葉町の様子について語った。

双葉町の人々が恐れるのは震災の記憶が薄れること。幼い子どもたち

は当然、生まれる前の震災のことは知らない。今後、そんな若い人たちが増えていくことから、本プロジェクトに参加し、福島浜通り・双葉を訪れることによってその存在を知ってもらいたいというのが、数少ない町民の願いでもある。

初日はまずはコミュニケーションをとることからと、スタッフの挨拶の後、班分けされたAチーム、Bチームごとに自己紹介。これまでの参加者とは異なり、その多くは少なからず映画の現場を経験しているという。ただ、制作側にまわったことがなく、概ねゼロからのスタート。ロケハン、脚本づくり、撮影、編集、上映会と、映画づくりの全工程を5日間で行うことは無謀なようにも思える。しかも今回は安全管理体制を強化しようとして、1日の作業時間を抑えるなど自主規制を進める意識改革を実施、無理のないスケジュールに挑戦する。加えて、住民にも映画づくりに参加してもらうべくワークショップを事前に開催（P13参照）するなど、新しい試みが行われた。



オリエンテーション後はチームごとに分かれ、それぞれコミュニケーションを図る。Aチームは会議室、Bチームはカフェスペースへ移動し、食事しながらミーティング



オリエンテーションの進行を務めるのは4回目の参加となる向田優氏。プロジェクト、ホワイトボードを使い全体の概要を説明していく。少々緊張しながら説明を受けるスタッフ&クルーの皆さん



双葉を知る町ガイド

映画づくりを学ぶとともに、まずは双葉町のことを知ってほしいと2日目の午前中にはこの町の歴史を知る「東日本大震災・原子力災害伝承館」見学と、魅力あるまちづくりのため2019年に設立された一般社団法人ふたばプロジェクトのスタッフによる町ガイドのプログラムが用意された。

映画づくり——特に脚本づくりとロケハンの一助になると、真剣に説明を受ける参加者たちの姿が印象的だった。実際、上映会では「美しい風景が撮れた」「また双葉町に戻ってきたい」と感謝する。



震災の教訓を次世代に継承する、県内唯一のアーカイブ拠点施設「東日本大震災・原子力災害伝承館」を見学。改めて双葉町の歴史を知る



ふたばプロジェクトのツアーは2チームに分かれ、被災した建物から復興に向けて作られた新たな名所などをめぐ

映画づくりに参加するスタッフとクルーがそれぞれ自己紹介。2時間にわたるオリエンテーションを通し、プロジェクトの概要と映画制作の流れを掴む。



脚本づくりの参考になったのは、2日目のふたばプロジェクトによるまちめぐりツアー。駅周辺から神社壁画が点在する街中を見て回ることで、つくりたい映画のイメージが膨らんでいく。舞台となる撮影場所（ロケ地）は物語を組み立てる鍵にもなるだけに、参加者も下見・選定に余念がない。

一方、Aチームは「それぞれの思いを大切にしながら、いろんな制限やルールがあるなか、どう取捨選択していくかの作業を凝縮してやりきった」満足感があつたという。完成作品の尺は10分と決まっているだけに、かなりの絞り込みをしているかなければならない。

B チームは先に撮影した子どもたちとのシーンを核にした展開に、A チームは細かな台詞は決めず、現場で作り上げていく形で進行。実質3日間という限られた時間を有効に活用しようとして、撮影準備を進めた。

A photograph showing three people standing on a traditional Japanese tiled roof. From left to right: a person in a dark green kimono, a person in a pink kimono, and a person in a dark kimono with a white obi. They are all looking towards the right. The background is a clear blue sky.

Bチームは「プレゼントという単語から“恩送る”という言葉が出てきた。恩送りは相手に限らず恩がめぐって返ってくる。そこからストーリーを展開」していった

「撮影をさせていただいている感謝を忘れずに安全第一で5日間を過ごして欲しい」と向田氏は伝える

映画はどのようにつくられるのか。その基礎を知っておこうと、数多くの作品を手掛けてきた全体進行の向田優氏による「映画づくり講座」がオリエンテーションの一環として開催された。

今回は映画づくりの現場に立ち会った経験者が多いものの、全体的な流れや細かな役割を知らない人がほとんど。映画づくりの資料をもとに「どんな部署・役割があるのか」の説明が行われた。改めて、映画の企画・制作・上映に至るまで多くの人がかかわっているのがよくわかる。

うち制作部は撮影場所内容に依り、数多くのロケハンを経て、申請を行う。「現場の土台づくり」に欠かせない重要な役割を務めている。

脚本は映画制作にとって必要な設計図。ト書き一つで人や時間、予算

Filmmaking

映画、撮りたいんだけど、どんな役割があるの？

- 監督** (又は演出)
 - ・チーフ
 - ・セカンド
 - ・サード
 - ・フォース
- 脚本**

映画制作によつての
必要な担当

 - 情報共有
 - スケジュール作成
- プロデューサー**
 - ラインプロデューサー
 - アシスタントプロデューサー
- 配給会社／製作会社**
 - 企画
 - 制作費 (製作集金、投資など)
 - スタッフティング
 - キャスティング
 - 配給・宣伝・上映
- 制作班**

現場の重要な土台づくり！

 - 予算の管理！
 - ロケ場所 の申請！
 - 弁当や車、宿泊の手配など…
- 俳優部**
- 美術**
 - ・大道具
 - ・小道具
 - ・装飾
 - ・持ち道具
 - ・流入物 (料理)

ストーリーや登場人物に
必要な**世界観**を背景や
アイテムによって表現！
- 衣装部 (スタイリスト)**
- メイク部**
- 特殊メイク**
特殊造形
- 撮影**
 - 撮影監督
- 照明**
 - 照明技師
- 録音**
 - 録音技師
- アクション監督**
 - 総括、特撮監督など
- 記録**
 - スクリーン
- 特機**
 - レーンやクレーン
- 操演**
 - 演技、スタモークなど
- 編集**
- VFX**
- 音楽・音楽**
 - 効果音、劇中音楽など
- 整音**
- カラコレ**
- 宣伝**
- メイキング**
- スチル**

どの役職をやるにも、各部署の仕事は知っておこう！きみは気になる役職はあるかな？

が動く。脚本が上がれば、各部の視点・立場で映画を完成するまでのプランやアイデアをプロデューサー、監督、助監督、撮影、照明、録音、美術、衣装メイク、制作、そして俳優部と共に打ち合わせ、リハーサルを行う。技術・時間・規模などをすり合わせ、撮るための戦略を考え、助監督は撮影スケジュール(香盤表)を組んでいく。問題を予想して先手先手を打つことが肝要。決定事項などの情報を共有し、各部署が連携をとって映画づくりは進んでいく。

情報

制作

- テレビ
- ラジオ
- 新聞
- 雑誌
- 書籍
- 音楽
- 映画
- ゲーム
- インターネット

流通

- 書店
- 図書館
- インターネット
- 音楽店
- 映画館
- ゲーム店
- インターネット

映画制作における搾取・差別・ハラスメントを起さないための具体的な取り組みは今回初

するようにってきた。
 そんな状況下、本プロジェクトも
 「ハラスメント」「安全対策」につい
 ての意識を持ち映画づくりに臨むべ
 きと、宮瀬佐知子リーダーがそれら
 のガイドラインを解説。深夜・長時
 間労働にならないルール決めを自主
 的に徹底するよう呼びかけた。

2017年以降、世界に広がった #MeToo運動は映画業界に深く根付いていたセクシャルハラスメント、パワーハラスメントがはびこる問題を表面化。肉体的・精神的・言動的暴力は個人の問題ではなく、業界全体のシステム不全として認識されるように。と同時に、低予算・過密スケジュール、安全管理責任の曖昧さ、「映画だからリアルを追求する」といった無理な演出による事故も起きていることから、映画制作においても例外なく、働き方改革が進められるようになってきた。

撮影

シナハン、脚本づくり、ロケハンが終わり、映画づくりのメインとなる撮影にシフト。演技指導、さらに撮影・録音などの技術指導を受けながら撮影は進む。

これまでのプロジェクトと異なるのは、脚本完成前に双葉町の子どもの撮影を行わなければならないかったこと。撮影時間も2日目の16〜19時に限定されていたことから、手際よく進めなければならない。

Aチームは登場人物の15年前という設定で、子どもたちが宝物をタイムカプセル缶の中に入れるシーンを撮影。室内で子どもたちに思い思いの作業をしてもらった。

Bチームは駅前の「ふたば、ふたたび☆みらいへのヒカリプロジェクト」のイルミネーションを使って撮影。登場人物が偶然出会った子どもたちにカメラをプレゼントするシーンだが、電飾を撮るためシャッタースピードを考慮した技術力が求められる撮影となった。

そして翌日、本格的な撮影がスタート。まずは完成した脚本にしたがって撮影プランを練っていく。早々に脚本をあげ撮影を開始したのはAチーム。ただ、台詞を現場で組み立てていくため、入念なりハッサーが繰り返し行われる。さすが演技

経験のある出演者たちはキャラクターの中にそれぞれの個性を反映、アドリブ力で撮影を進めていく。

ロケ地は産業交流センター、図書館、神社、地下道など日常的な双葉町の風景がうまく取り込まれる。今回、最年少の参加者となった高校1年生の伊藤脩平くんは「歩きながらの撮影はずっしりと重みがあった」と、機材とカメラマンの責任の重さを感じたと振り返る。

Bチームは午後からのスタート。日没が早く、撮影は時間との戦いだ。特に焦る様子もなく、丁寧にカットを重ねていく。ファーストシーンは女性3人が旅するハイエースを使っている撮影。俳優としても活動する佳香さんが1週間前から始めたというギターを使い、即興で歌を披露、堂に入っているのが凄い。

翌日は双葉町で働く齊藤泰道さんが参加。演劇活動をしていたといわれるだけあり、出演者たちとの絡みもごく自然。霜も降りた寒い朝での撮影ながら、驚異の集中力で次々と主要シーンを撮り切っていた。

子どもたちにはふたばプロジェクトが管理する洋館、旧三宮堂田中医院診療所に集合してもらい建物内で撮影。出演者の子ども時代の設定だったが、偶然にもどこか雰囲気似ている!?

産業交流センターでは外階段、屋上を使って撮影。風が若干強めながら晴天の撮影日和

最年少の伊藤脩平くんは東日本大震災の被害が大きかった福島県相馬市から参加

出演者同士がヘアメイクを担当しながら臨む

図書館前の広場では仕出し弁当の福島浜通り名物、なみえ焼きそばも小道具として活用



カメラ、録音マイクなどの使い方を学ぶ

講習会3

オリエンテーションがひと段落したところで、技術スタッフによる機材の講習会が行われた。映画やドラマなどの撮影現場で出演した経験を持つ参加者は多いものの、やはり本格的な機材を実際に手にして操作した人は少ない。

「俳優は監督や演出部の領域に踏み込んではいけないという暗黙のルールがあり、かねてから不自由に感じていました。だからこそ制作の仕事もしてみたく、技術的な講習を受けたうえで映画づくりに参加できるのはとてもためになります」と、参加者のポテンシャルは高い。

講師はAチームの制作をサポートする、撮影監督の迫あすみ氏。カナダで学び、オーストラリアで経験を積んだ撮影技術を分かりやすく説明していく。さらに各チームのリーダー、本部の制作スタッフがサポートしながらカメラ、マイク、モニタ、結線など機材の説明をはじめ、撮影のコツ、マイクのポジショニング、さらにカチンコの使い方を披露する。

あらかじめ参加者には資料が配られ、迫氏の説明と照らし合わせながら確認していく

モニタのほか、タブレットなどを使い、撮った画について解説していく



プロ仕様の音声マイクはカバーを使った方法も。カメラにあわせたポジションの取り方が肝となる

講習を受けた後は実際に参加者たちがそれぞれ操作。会議室を出た後はチームごとに実践してみる



A team



B team



すすきが生い茂る広場にハイエースを停めて車内のシーンを複数カット撮影。狭いだけに撮影も工夫が凝らされる



会社出勤前の齊藤さんとの撮影は早朝に決行。霜が降りる今冬一番の寒さとなった

北林リーダーが体調不良で離脱するアクシデントを乗り越え、無事クランクアップ!



双葉町駅前イルミネーションのテーマは「未来へ続く光のトンネル」。偶然にも、Bチームが題材にした「恩送り」の思がめぐる＝子どもたちの未来へ託したカメラのプレゼントと意味が重なった



Day4

編集

映画の出来を左右する編集作業。撮りだめた素材をどう生かし、つないでいくか。専門の機器を使いながら、完成に向けての作業を進める。

クランクアップしてホッとする間もなく編集作業へ。これまでのプロジェクトでは時間が許す限り作業を粘っていたが、今回は終了の時間を決めて取り組むことに。時間を無駄にしたいくないと、集中して臨む姿勢が頼もしい。また、両チームにプロの編集者がついていいるのも心強い。編集は撮影した素材をどう切ってつないでいくかも重要だが、効果音やBGMの挿入、色味の調整、特殊効果、タイトルをどうみせるか、エンドクレジットの入れ方、選曲など細かな作業が必要になってくる。

Aチームはまず台本の流れをホワイトボードに書き出し、映像をチェック。挿入したい風景を追加で撮りに行く実景班と編集班に分かれてそれぞれ動き出した。編集班は技術スタッフのプリンセス・アンボールの説明を受けながらデジタル編集ソフトを使って進めていく。

一方、Bチームは大きなモニタに編集ソフトの画面を映し、松本佳樹氏がみんなの意見を聞きながら手際よく編集を進めていく。また、その

場でアフレコや効果音を収録できるようマイクを用意し、親戚が集まったときの様子（ガヤ）を再現。BGMにもこだわり、翌朝、村川晴南さんが作曲した曲を収録した。



まずは撮影した膨大な映像を台本に沿って確認。最適なカットを選び、脚本に基づいて物語の流れを再構築していく。Aチームの編集班は会議室でモニタを使い、編集作業を進める（写真左）。Bチームはホテルの一室に集まり、編集しながらアフレコや手元の追加撮影を行った



市民参加によるワークショップ開催



カメラ慣れしているお子さんも多く、何事も物おじせず積極的に参加。明るいパフォーマンスを披露する



かねてから地元住民のみなさんを巻き込み、ともに映画づくりをしていきたいと、昨年度は「映画と一緒にしよう！」とエキストラを募集。さらに今年度はもう一歩踏み込み、一緒にアイデアを考えたり、本格的な演技をしていただこうと、ワークショップを事前に開催した。

向田優氏を講師に迎え、学生リーダーの水野彩美さん、中澤莉胡さん、日高真優さんがサポーター、昨年もエキストラとして出演してくれた綾部蒔千ちゃん、灯来ちゃん、高久田寧々ちゃんを含む6人の子どもたちが参加した。

最年長は小学校6年生。いずれも震災を知らない子どもたちばかり。そんな子どもたちが元気に歌って踊る姿を見ているだけで地元の大人たちは胸に迫るものがあるという。彼らの出演シーンが期待される。



A team

ふたばのよつば

(11分)



出演
水野彩美、一宮レイゼル、小熊美由紀、鈴木智恵、四宮義斗、伊藤脩平、（双葉町の子どもたち）綾部蒔千、綾部灯来、岩本真歩、岩本真芽、高久田寧々

STORY
思い思いの宝物をタイムカプセル缶に入れた4人の子どもたち。15年後、成長した彼らのもとに「2025年12月20日午前10時 双葉町こども園に集合」といった招待カードが見つかる。久しぶりに再会し話が弾むも、肝心のタイムカプセルを保管した場所は見つからない。そんな状況にイライラし始めた4人。そのうち陰湿な雰囲気になり、ついには言い合いに……。



B team

めぐる

(12分)



出演
村川晴南、佳香、九條えり花、中亮介、中澤莉胡、白川紗江、（協力してくれた地域の方）齊藤泰道、綾部蒔千、綾部灯来、高久田寧々

STORY
ハイエースで旅するハル、エリカ、カコの女性3人組。双葉町にたどり着くも、道が分からずガソリンもなくなりイライラし始めたエリカを、二人はまるで気にする様子がない。さすがにお腹もすいたからと、3人は車から降りてぶらぶらとまち歩き。だがハルは一人、手持ちのカメラで景色をひたすら収めるだけで一向に口を開かず、画像を見せることもしない……。

上映発表会

最終日となる5日目。完成した作品を関係者ほか一般のお客様に披露する、本プロジェクト最大のイベントを産業交流センターで開催。

過ぎてしまえばあっという間の5日間。緊張がつづいた映画づくり体験だったが、それを締めくくる上映&発表会を11時より開催、その準備が早朝より進められた。会場入り口には手作りの手描き案内板を掲示。これまでのプロジェクトをまとめたパンフレットをはじめ、オリジナルのトレーナー&メモ帳などのノベルティが来場者向けに用意された。

一方、各チームは完成作品の上映テストを実施。音声、明るさなどの調整を行うのだが、今回はなかなかスクリーンに映像が映し出されず、関係者の肝を冷やした。なんとかぎりぎり間に合い、来場者を迎える準備が万全に整った。今年は晴天にも恵まれ、双葉町の人々や撮影に協力した関係者で会場は満席となった。

さらに今回は撮影に協力いただいた子どもたちをはじめ、双葉町住民の方々にも感想を伺うことに。「双葉町にとっても特別な体験」「素敵な作品に感動した」との温かい声に励まされる。と同時に、未来のまちづくりを考えるきっかけになった手ごたえを感じる上映発表会となった。

「拝見した映画は素晴らしい、双葉の現状を撮っていただき、ありがたく思います。双葉の魅力を多くの人に伝えていただければ幸いです」と双葉駅西管理組合・国分信一さん



上映会場入り口には本部スタッフによる手書き案内図を用意し、Aチーム、Bチームのクルーたちが出迎える。一般客のみなさんには記帳をお願いし、パンフレットやノベルティをプレゼント



お客様からは「子どもたちの出演が嬉しすぎる」「減多に体験できない機会をありがとう」「みなさんがまた戻ってきたいと思える町にしたい」との感想をいただいた

「一つの目標に向かいみんなが共有する空間の良さ。短い時間だったからより実感できた」と学生リーダーの水野彩美さん。出演した子どもたちも登壇し「今年も参加。両チームに出られて楽しかった」「緊張したけど、みんなが協力していい作品ができて嬉しかった」とコメント



「出演していないのに、お客様に見ていただくことがこんなにもドキドキするなんて。プロの皆様を支えられ、いろいろ教えていただき、映画づくりは決して一人ではできないと実感。次の現場でお会いできるよう精進します」 Aチーム・中国菜タチ

「自然豊かな素敵な双葉町をどう生かせるか、とことん話し合いました。さらにご参加いただいたお子さんと出演した私たちに似たところがあるなど、小さな偶然・奇跡が作品をいい形にしてくれました」 Aチーム・一宮レイゼル

「1回目から参加していますが、変わりゆく双葉を映像に残せていけることが嬉しくて。また、改めて双葉の方との繋がりが芽生えたりと、このプロジェクトには大きな意味があると思います。また来年も参加したいです」 Bチーム学生リーダー・中澤莉胡

「プロジェクトに参加するのは2回目ですが、メンバーが違うだけで作り方も雰囲気も全然違う。新しい発見もあり、凄く充実した5日間になりました」 Aチーム・鈴木智恵

「同期からもらった恩送りを元に、この作品を作りました。このステージを作ってくれた恩送りもあり、僕たちもこの作品を介して恩送りができたのかなと思って嬉しく感動しました」 Bチーム・中亮介

「みんなで意見を出し合って決めたタイトル『めぐる』をとても気に入っています。主人公ハルの名前からして季節が巡り、人との出会いが巡り、感情表現の一つとしてのカメラが大人から子どもと世代を巡っていく。車で双葉を巡って映像に焼き付けていく——いろいろな意味を重ねました。いただいた恩をすべてお返しするのは難しいけれど、今回の経験から監督をやりたい意思も芽生え、表現を通してこれから恩を送っていかれたらと思います」 Bチーム・九條えり花

「地元の方にも深く関わっていただき、ここからこのプロジェクトは本格的に動き出すだと改めて思いました。これからも続くプロジェクトにしたいと考えたく、今回はスタッフとして参加。目標は、今回参加してくれた子どもたちが学生になった時にこのプロジェクトに参加してくれること。実現したら泣きます。そんな形で、このプロジェクトが双葉町に根付いたらいいと思います」 本部学生リーダー・日高真優

「現場経験のある方が多い中、ほぼ未経験の自分は足を引っ張らないように思っていたら、主役をやることに。遠慮していた気持ちや自信のなさに関係なく随所で決断を迫られ、未熟でも完成させなければならない状況に覚悟を決めました。ここでしかできなかった経験を糧に、さまざまな表現に関わっていただきたいと思います」 Bチーム・村川晴南

「今回の作品のテーマは“プレゼント”。まさにこの5日間は自分にとってプレゼントのような時間でした」 Aチーム・伊藤脩平

「こだわりの強いメンバーが集まりながらも、ほかの人の意見を取り入れ、より良い意見を出す良い循環が生まれ、凄くいい雰囲気作品を作ることができました。改めて見た完成作品は引きの画が多かったこともあり、双葉町の景色はとても綺麗だと再確認。この景色があってこそ主演の3人が生き生きとし、映画に素敵なエッセンスを与えてくれたと思います」 Bチームリーダー・渡邊りか子

「地元の方に素敵なまちめぐりツアーを催行していただき、またここに帰ってきたいと思える作品ができました」 Aチームリーダー・宮瀬佐知子



Fukushima Hamadori Cinema project 2025



HAMACUL
ART 2025
PROJECT

ハマカルアートプロジェクト



経済産業省

ハマカルアートプロジェクト2025

キネマ旬報企画 映画24区

地域プロデュース事務局

TEL : 03-6264-3880

公式HP : fukushima-cinemaproject.jp